



トニ・モリスンの小説における物語の枠組みと三角形のきずな

著者	鵜殿 えりか（悦子）
内容記述	この博士論文は内容の要約のみ公表しています
発行年	2014
学位授与大学	筑波大学 (University of Tsukuba)
学位授与年度	2013
報告番号	12102乙第2678号
URL	http://hdl.handle.net/2241/00124423

論文概要

「トニ・モリスンの小説における物語の枠組みと三角形のきずな」

鵜殿えりか（悦子）

本論文では、アフリカ系アメリカ女性作家トニ・モリスンの小説テキストを、《物語の枠組み》、そして弱者どうしの《三角形のきずな》という観点から分析した。第一部では初期の小説について、第二部では中後期の小説について論じた。

序論では以下のように本論文への導入を行った。モリスンの小説テキストを、《物語の枠組み》というフォルムに関する観点と《三角形のきずな》というコンテンツに関する観点から分析することにより、フォルムとコンテンツがどのように相互に関係し影響し合っているかを探った。《物語の枠組み》に関しては、モリスンの創作絵本がイソップ寓話を下敷きにし、その物語のメッセージを換骨奪胎しまったく別のメッセージへと作り替えるという構成であることを手がかりにし、彼女の小説においても同じことが行われているのではないかという仮説を出発点とした。《三角形のきずな》に関しては、モリスンの小説のテーマが弱者どうしの強いきずなであることを確認し、そうした弱者どうしの双数的な関係が第三者の存在により、どのように介入され、どのように外部の世界へと接合されるかを辿ることを目的とした。

第一部、「第一章 裏切りとセクシュアリティ——『青い眼がほしい』」においては、以下のように論じた。『青い眼がほしい』においては、幼児用教本『ディックとジェイン』および映画『模倣の人生』が物語の枠組みであるかのように設定されているが、実際はそれらは表面的な役割しか果たしていない。隠されている物語の枠組みはネラ・ラーセンの小説『パッシング』と別のハリウッド映画であり、セクシュアリティを背景に三人の少女の間で繰り広げられる階級闘争がこの小説のテーマである。

「第二章 閉ざされた水の下欲望——『スーラ』」においては、『スーラ』を「レズビアン小説」と呼んだバーバラ・スミスの議論に基づき、以下のことを明らかにした。スミスはこの小説が「レズビアン小説」であるのは「表現された感情」においてのみであると述べたが、そうではなく、この小説は果敢にレズビアン・セクシュアリティを描きだそうとしている。また、この小説ではおとぎばなし「チキン・リトル」が物語の枠組みとして機能しているが、このおとぎばなしは最終的に換骨奪胎される。「チキン・リトル」では動物たちは皆洞穴で狼に喰われてしまうが、『スーラ』では、破滅の一手手前でネルは踏みとどまり友への愛

を回復するように、元々の物語の枠組みが新しい物語の枠組みへと作り替えられ、新たな啓示へと至る様を辿った。

「第三章 三角形の欲望——『ソロモンの歌』」では以下のように論じた。「ソロモンの歌」とは主人公ミルクマンのルーツである南部地方に伝わるわらべ歌であり、ソロモンという英雄が飛翔してアフリカに戻ったという内容である。ミルクマンの旅は一見そう見えるように英雄ソロモンを求める旅ではなく、自らの本当に愛する者を見いだすための旅であることを、イヴ・コゾブスキー・セッジウィックの欲望論を参考にしつつ検証した。

「第四章 赤ずきんちゃん気をつけて——『タールベイビー』」で論じたことは以下のとおりである。「タールベイビー」とは、作中に説明のあるとおり、アフリカ系アメリカ民話に登場するタールを塗った捕獲用の人形のことであり、このタールベイビーを中心に論じる研究が多い。しかし、このタールベイビーはレッド・ヘリング（目眩しの仕掛け）であり、隠された物語の枠組みは民話「赤ずきん」であることを証明した。しかし、この「赤ずきん」の物語の枠組みも、最終的に別の物語へと作り替えられる。また他の小説同様、この小説も、異性愛の外見にもかかわらず、「レズビアン連続体」をテーマとしている。第三の女の援助を得、主人公ジェイディーンは男の罠を逃れ新しい人生へと踏み出す、という別の物語の流れへと展開する。

「第五章 ブラック・ガール、ホワイト・ガール——「レシタティーフ」」では、初期と中後期の小説のちょうど中間に位置する、モリスン唯一の短編小説「レシタティーフ」を扱った。この短編小説には、既存の物語の枠組みを換骨奪胎し新しい物語を作るというフォルム上のテーマと、弱者どうしの三角形の関係というコンテンツ上のテーマとともに、中後期の小説の特徴である人種・歴史のテーマの前景化があることを指摘した。

第二部、「第六章 語るもの／語りえぬもの——『ビラヴィド』」では以下のことを主張した。『ビラヴィド』の物語の枠組みはスレイヴ・ナラティヴであるが、スレイヴ・ナラティヴの枠組みを使いながらも、その画一的な語り口は修正され、主人公セサの母親としての情感に溢れた語り口が圧倒的な存在感を主張する。そして、このセサによる饒舌な語りとビラヴィドの沈黙の語りという二つの特徴的な語りの対立的な構図、すなわち、「語るもの」と「語りえぬもの」の構図が明らかとなる。さらに、セサとエイミーによる弱者連帯の物語と、ビラヴィドの孤立し堂々巡りする物語という相対立する構図がある。このように複雑に絡まる物語の枠組みを通じて、奴隷制という人種・歴史的テーマが読者に投げかけられている。

「第七章 反復・変奏／変装・誤読——『ジャズ』」では、歴史的実象が背景にありながらそれが直接的に提示されるのではなく、ジャズのリズムが物語の枠組みを構成している。『ジャズ』には、ジャズのように即興的でつねに変化する物語の流れとともに、ジャズのレコー

ドのようにつねに同じ所に戻ってゆく物語の流れの二つが存在し、両者の流れは決定不能である。また、異性愛の物語の様相を呈しながらも、この小説の主題となっているのは母を媒介とした、弱者である女どうしの連帯であることを明らかにした。

「第八章 ルビーの血／エメラルドの水——『パラダイス』」では、『パラダイス』におけるいくつかの二項対立の構図に着目した。ルビー対修道院、男対女、母対娘、色の黒い黒人対色の薄い黒人、保守対リベラル、異性愛対同性愛等、様々な対立の構図が見られる。しかしそうした対立の構図は徐々に脱構築され、もともとの枠組みは無効化される。小説の最後は、憎み合っていた母と娘が和解し、互いを許す「パラダイス」の光景によって締めくくられている。双数的な母と娘の関係がいかに新しい関係の局面へと開かれていくかを考察した。

「第九章 廃屋のカナリア——『ラヴ』」では公民権運動の時代が舞台となる。公民権運動というアフリカ系アメリカ人の権利を求める運動の裏で、それによって不利益を被り没落するアフリカ系アメリカ人という構図、差別の対象としての黒人男性でなく、圧倒的な権力を持つ家父長としての黒人男性という逆転した構図が浮かび上がる。家父長の圧力の下で長い間憎み合ってきた二人の女は、第三の女の介入により本来の愛情を回復し、同時に、彼女たちの陰に隠されていたもう一組の女たちの愛の物語の所在を確認した。

「第十章 家父長制、奴隷制、母と弟——『マーシィ』」においては以下のように考察した。『マーシィ』では幾組かの母娘関係において母と娘の思いは完全に断絶している。壁一杯に書き連ねられた解説不能の文字の羅列はこの小説の描く行き場の無さを象徴しているが、その中で唯一希望を見いだせるのが、語り手フロレンスとドーター・ジェインとの関係である。ジェインは物語の主筋にはまったく関係のない第三者であるが、彼女の存在により閉じた物語世界と外部世界との確かな繋がりが暗示されていると指摘した。

《物語の枠組み》

モリスンの小説には、第一作から最新作まで、つねに何らかの物語の枠組みが内蔵されていることを明らかにした。そのジャンルはおとぎばなし、寓話、民話、映画、小説、歴史、聖書、わらべ歌など多岐にわたるが、必ず何らかの物語の枠組みが存在する。しかしそのあり方は決して顕在的ではない。たとえば、小説『タールベイビー』では、表面上黒人民話「タールベイビー」が物語の枠組みであるようにみえるが、実際は別の隠された重要な物語の枠組みがあることが判明する。このようにモリスンの小説では、表面上の物語の枠組みと深層的な物語の枠組みがダブル・プロット状に構成されている。そして、もともとの物語の枠組みは換骨奪胎され、まったく違う物語へと作り替えられる。とくに歴史を前景化した中後期の小説ではアメリカ合衆国の歴史が物語の枠組みとなっているが、主流文化の視点から書かれ

た合衆国正史は、アフリカ系アメリカ女性を初めとする弱者の視点から眺め直され、全く異なった物語へと書き替えられている。

《三角形のきずな》

物語のコンテンツは前述の物語の枠組みと密接に繋がっている。モリスンの多くの小説において追究されているのは、社会的な弱者どうしの強い連帯のあり方である。弱者どうしの関係は双数的な関係ではなく、両者の間に第三項の存在が介在している。第三項の存在は、二人にとっては一見何の関係もない、多くの場合「その場限り」の、第三者的な存在であるが、相互的にのみ閉じこもる弱者どうしの関係を再生させ、外の世界へと接合させ、永続的なものへと変容させる。またその過程で、家族、血縁、人種、性等による固定化された繋がりが無効にされ、新しい人と人との関係が起ち現れてくる。そして、物語内容は、物語の進行につれまったく新しいものへと作り替えられてゆく。このような弱者どうしの連帯を《三角形のきずな》として表現した。

上記のように、フォルムとコンテンツが一体となったトニ・モリスンの小説の語り的手法とその文学世界の独自性を検証した。